

刻む会

たより

No.31

2005.12..15

長生炭鉱の「水非常」を歴史に刻む会

代表 山口武信

宇部市常盤町一の一の九 宇部緑橋教会内

電話 〇八三六(二)八〇〇三

事務局

二〇〇六年「追悼式」を前にして

事務局 戸井雄二

今年も一年間、毎月の事務局会議(出席者七〇人)を中心に会の活動を続けてきました。十一月の会議の後で韓国遺族会(金会長)とも連絡をとり、来年の追悼式の日程が決定しました。(遺族団の来日は二月三〜五日、そのうち追悼式は二月四日 土曜日)

毎年の年間活動の二本柱は冬の追悼式と夏のフィールドワークですが、今年はその他に大きな動きがありました。四月に韓国政府の「真相究明委員会」による調査団が来日し「長生炭鉱水没事故」の調査が行われ、またその機会に特別集會が開催されました。私たちの会は他の団体と一緒にこれに協力し、そのくわしい報告を六月に発行した本紙三十号に掲載しました。その中から山内弘恵さんの巻頭文「韓国の真相究明法と長生炭鉱」の末尾の部分をここに再録します。

「私たち、刻む会」にとってもこの法律の施行により、これまで暗礁にのりあげていた事実調査、追悼碑建立に向けて一筋の光が見えた気がします。しかしながら、私たちは日本政府がこれら真相調査及び慰霊事業の実現にあたって、誠実に対応するように働きかける必要があると思います。今後の動きに注目したいと思います。」

その後日本政府による一定の動きがあったもののまだまだ本格的になってはおりません。私たちの会としては草の根の市民運動の限界を感じながらも、今自分達にできることの一つとして、国会議員に働きかけることにし、別記「陳情文」を厚生労働委員会委員七〇名宛宛てて送付しました。(本紙 ページ)

七月には韓国の動きに呼応して日本国内で有志が「強制動員真相究明ネットワーク」を結成、私たちの会も呼びかけを受けてこれに加入しました。八月には戦後六十年に因んで各地でさまざまな催しや集會が開かれましたが、「山口/平和のための戦争展」に取り上げ

ていただいたり、地元テレビ局の番組(シリーズ戦後六〇年)に山口代表が出演するなど、機会が与えられました。

今年一年の歩みを振り返りましたが、最後に会の最大の課題である「追悼碑建立のための土地」の件についてご報告しなければなりません。この件では、夏のフィールドワーク(七月三十日)が終わった頃から、一つの有力な「候補地」が上がつてきました。しかし、実際に土地価格が提示されると、予想以上に高価な「物件」であることがわかり、今のところ決心がつかないまま年末を迎えているというのが実状です。

あと一つ付け加えますと、長く事務局態勢を支えてこられた大野さん山内さんご一家がこの夏から長期出張で渡米、会としては大きな欠けを覚えています。とは言っても今はあり難いことに、距離の長さ遠さを飛び越えてインターネットで身近に連絡が取り合えるので幸いです。(四ページに山内さんからのメールを載せました。)

証言を繰る③

山陽小野田市東千崎

姜 福徳(松本スエ子)

姜さんは結婚して海を渡り一九三七年(昭和二年)から一九三九年(昭和十四年)秋まで長生炭鉱にいた。当時朝鮮へ募集に来ていたのは、同朋の労務係をしていた日本名を山中と言う人と鉱員で日本名を田村といった二人の人物であった。当時の長生炭鉱の納屋は、周りは板で囲われ、飯場も刑務所のような所で、同じ朝鮮人の門番がいた。一九三九年の夏、二人の飯場の独身の者が逃げ出すところを捕まっけて叩かれていた。彼らは殺されると言っていた。

また一九三八年(昭和十三年)頃だったが、所帯持ちの朝鮮人が、体が弱いので仕事に耐えられないから暇をくれといったところ、事務所に連れて行き鍵をかけて三人の労務の者が棒で叩いては水をぶっかけ、また棒で叩いていたので、私とその人の奥さんに知らせに行ったら、その奥さんは事務所の窓ガラスを棒で叩き割って、自分も一緒に殺してくれと叫んでいたが、労務係に棒で追い払われてしまった。私も一八歳頃だったので恐ろしくて逃げ帰ってきた。

一九三九年(昭和十四年)秋の頃主人と相談して長生炭鉱から逃げ出すことにした。私は先に兄のいる厚南炭鉱に主人を逃がして、後から私は子供たちを連れて行くことになっていた。主人が居なくなつたのを知って労務係の者が来て主人の行く先を聞いて責めるので私は(今五十四歳になる)女の子が赤ん坊を背負って朝早く床波駅に出た。

ところが、誰かが門番に告げ口に行ったらしく、わたしの乗る電車が其処まで来ているのに捕まっけてしまった。そして労務の事務所に連れて行かれて、お前は親父のところに行くんだらう、どこに行っているのか言え、と朝も食へなかつたのに、昼食を抜かれ、その上夜になつてもまだ責められた。

そのうち、労務の二人、山中と田村(どちらも朝鮮人は相談して、乳飲み子を連れてでは大変だろうと言ってくれて、田村の家に連れて行かれご飯を食べさせてもらった。食べたあとで田村が「便所へ行くから出したと言っておく」と言つて逃がしてくれたので、常盤駅へと夜道を急いだ。

私たちは兄の居る厚南炭鉱へ逃れることが出来た。その後も長生炭鉱の労務は人を遣つて主人の居所を捜していた。長生炭鉱の時と同じ名前働いていたので、兄の家でご飯を

食べていたところ、彼らは主人を探し出してやってきた。主人は長生からやってきたと言うので、昼飯を食べかけたまま家の裏から逃げ出して、そのまま小野田市の萩森炭鉱に移った。萩森では名前を変えて働いたので、二度と追われることはなかった。

一九三八年(昭和十三年)だったか、私が社宅の道を歩きよつたら、労務の西村が、「今、水が出たとうそを言うたので、お前のおやじがどづかれよるぞ」と言うたから、私はびつくりして急いで事務所に行つたら何事もなかった。(西村が私をかもうたのいね)

それまでも「チカチカ水が漏る」と言うて坑夫たちは坑内から上がつてきよつた。それでも他人には「水が出た」と言うて殴られるから、水が出ても、体の具合が悪いとか急病とか言うて上がりよつた、ということである。

(聞き手 山口武信 一九九三年頃)



国会議員(厚生労働委員70名)宛てにこの陳情文を送り、追悼碑の早期建立に対し
理解と支援を訴えました。

2005年12月1日

厚生労働委員会 委員各位

長生炭鉱の“水非常”を歴史に刻む会
代表 山口武信

韓国「日帝強制占領下強制動員被害真相究明等に関する特別法」 制定に関する陳情

日夜国政にご尽力くださり、心より敬意を表します。

私ども「長生炭鉱の“水非常”を歴史に刻む会」は、1942年2月3日、戦時下の山口県吉敷郡西岐波村床波（現在は宇部市）の長生炭鉱水没事故による犠牲者183名のそれぞれの本名を刻んだ追悼碑の建立を目的の一つとして活動をしている団体であります。

犠牲者のうち137名は当時の朝鮮人でした。私どもの会は1991年以来、追悼碑の建立に努力して参りましたが、未だ建立のための土地の目処さえ立っておりません。特に、朝鮮人犠牲者の場合は、はるばると彼らの肉親が事故現場を訪ねてきても、個人をしのぶ縁さえありません。

戦時下最大の炭鉱事故であるにも拘らず、人々から忘れられようとしていました。私どもの会では、会の発足以来、毎年2月の事故当日前後に韓国からご遺族をお招きし追悼式をいたしております。

このたび、上記件名の特別法により、韓国では国の調査委員会が設けられ、本年2005年4月21日より同月23日まで調査委員会による福岡県や宇部市の第1回現地調査が行われました。

この特別法によれば、長生炭鉱の場合、遺骨は海底深くに放置されたままで収集は不可能と思われるので、上記特別法第3条2項5号（慰霊空間の造成）及び第21条（慰霊事業）に関する事項が考えられます。

水没後63年、坑内労働に従事し水没事故に遭遇した労働者、特に137名の朝鮮半島出身者の追悼碑を建立することは、犠牲者に対する日本国としての当然の行いであり、また犠牲者ご遺族も高齢となり一日も早い建立が待たれているところです。追悼碑の建立に対し、国会議員の皆様、特に厚生労働委員会の委員の皆様のご深いご理解とご支援、ご尽力をぜひとも賜りたく、心より切にお願い申し上げます。

皆様方の今後益々のご活躍を祈念申し上げ、陳情といたします。

二〇〇六年

遺族招へい

追悼式のご案内と

カンパのお願い

年が明けて二〇〇六年も韓国から一〇程度の遺族をお招きして二月四日(土)午後一時半から第一五回目の追悼式を行うことになりました。

ご多忙とは存じますが、ぜひご参加下さり、遺族と共に海底に眠る犠牲者を追悼していただければ幸いです。

また今回もご遺族をお招きするために約一〇〇万円程度の費用が必要となります。私たちの運動をさらにご支援下さり、カンパをお寄せ頂きたいようお願いを申し上げます。



2005 夏の F.W

(宇部日報記事)



犠牲者の位はいを並べる参加者(西光寺)

水没事故学び ピーヤに献花

歴史に刻む会

二百人近い水没死亡者を出した長生炭鉱水没事故の悲惨な事実を市民に知ってもらおうと「海に沈んだ炭鉱 フィールドワーク」が七月三十日、宇部市西岐波の西光寺で

開かれた。三十人が参加し、悲惨な事実を耳を傾けた。長生炭鉱の水没事故を歴史に刻む会(山口武信代表)主催。

水没事故は一九四二(昭和十七)年二月三日、長生海岸から約一キロ沖合の坑道で発生。朝鮮人百三十四人を含む百八十七人の命が失われた。遺体は一人として引き揚げられておらず、同海岸近くの同寺に位はいだけが残っている。

会員の戸井雄二さんから同会の趣旨や当時の説明を受けた後、会員らが制作した紙芝居「アボジ(お父さん)は海の底」をビデオにしたものを上映し、当時の厳しい労働状況などを学んだ。

世話人の島敏史さんが宇部の炭鉱について説明した後、同海岸に移動し、事故を物語るピーヤ(排気筒)に向けて献花。過酷な労働を強いられ、事故で亡くなった多くの労働者に思いをはせた。

メール

早いものでアメリカに来て3ヶ月が経過しました。苦手な英語に日々苦しめられつつも、何とか生活はできています。私たちの住んでいる街はアメリカでも田舎で、牛や馬が沢山います。日本人は会社の関係者と大学の学生くらい。コリアンは出会ったことがありません。チャイニーズはそこそこいるようで、中華料理店は多々あります。

2時間程度車で行くところとちよつと大きな街に行けます。そこには、日本人もコリアンも多くいるようで、日本料理も韓国料理も食べられます。日本食材は韓国系のお店に頼って手に入れていきます。アメリカに来て日韓の食材が似通っていることを改めて認識しました。

このコリアン達はどこから来たのか?そのルーツを考えると多分朝鮮戦争と関係が深いのではないかと話しています。もしも...こちらのコリアンとそんな話ができたら...?まずは言葉の壁を何とかしなければと痛感した次第です。

さて、追悼碑建立のための土地に明るい光が見えたとお聞きしました。しかし、とても困難な問題が立ちはだかっている...。遠くの地で何もできないことを心から申し訳なく思います。けれども、多分、これは最大で最後のチャンスだと思えます。遺族の方々の長年の「恨」が溶けていくような追悼式が迎えられるよう、皆様のご協力を心からお願いいたします。

山内 弘恵